

「この雑誌はハゲタカですか？」への対応

－「怪しげ」を納得するために－

山崎 むつみ

静岡県立静岡がんセンター医学図書館

2018年の毎日新聞に「ハゲタカ雑誌」の記事が掲載されてから、「ハゲタカ雑誌」は一般的にも知られるようになり、今では、フリーのイラストを提供している「いらすとや」にもハゲタカのイラストが掲載されている。一般メディアの報道だけでなく、日本医学会や、職場での注意喚起も多くなり、その結果、医学図書館へ投稿先相談が寄せられるようになった。

雑誌が **Predatory Journal**（以下、ハゲタカ雑誌）かどうか？という問い合わせには、ある程度、明確に根拠を持って返答をしなければならない。判断のためには、さまざまなチェックリスト、指標などが存在している。しかし、それらの指標やチェックリストには、実際のその分野に属していないとわからないことなどもあり、図書館担当者には判断ができないチェック項目や指標もある。加えて、「**Oncotarget** 誌」のようにインパクトファクターがついている安全な雑誌と思っていたところ、突然「ハゲタカ雑誌」扱いとなった雑誌もあることから、依頼者からは暗に「**Oncotarget** のようにはならない投稿先」をもとめられるようになった。そこで、従来提示されている「ハゲタカ雑誌」判断のツールであるチェックリスト、団体への加盟状況などに加え、文献書誌データベース等を使い、ライブラリアンとして「怪しげ」であることを納得した上で医療者に報告するようにした。

この作業を行う中では、チェックリストに指定された条件通りの記述が存在すること、「怪しげ」にもいくつかのパターンがあること、「ハゲタカ雑誌」への投稿勧誘と「悪徳商法」との共通点、寄せられる「ハゲタカ雑誌かどうか」の問い合わせの本当の意味、また、「ハゲタカ雑誌」とは本当はなにか？など、改めて確認することとなった。

本発表では、このように実際に対応し、遭遇した事例について報告をする。